ビーナス殺人ライン

書下し長篇ツーリング・ミステリー

TOKUMA NOVELS

石井敏弘

TOKUMA NOVELS

石井敏弘
ビーナス殺人ライン

発行者　荒井　修
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二一

©Toshihiro Ishii 1989

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当　池田孝之〉

一九八九年六月五〇日初刷　七〇〇円

ISBN4-19-153973-6

書下し長篇ツーリング・ミステリー

ビーナス殺人ライン

石井敏弘

徳間書店

TOKUMA NOVELS

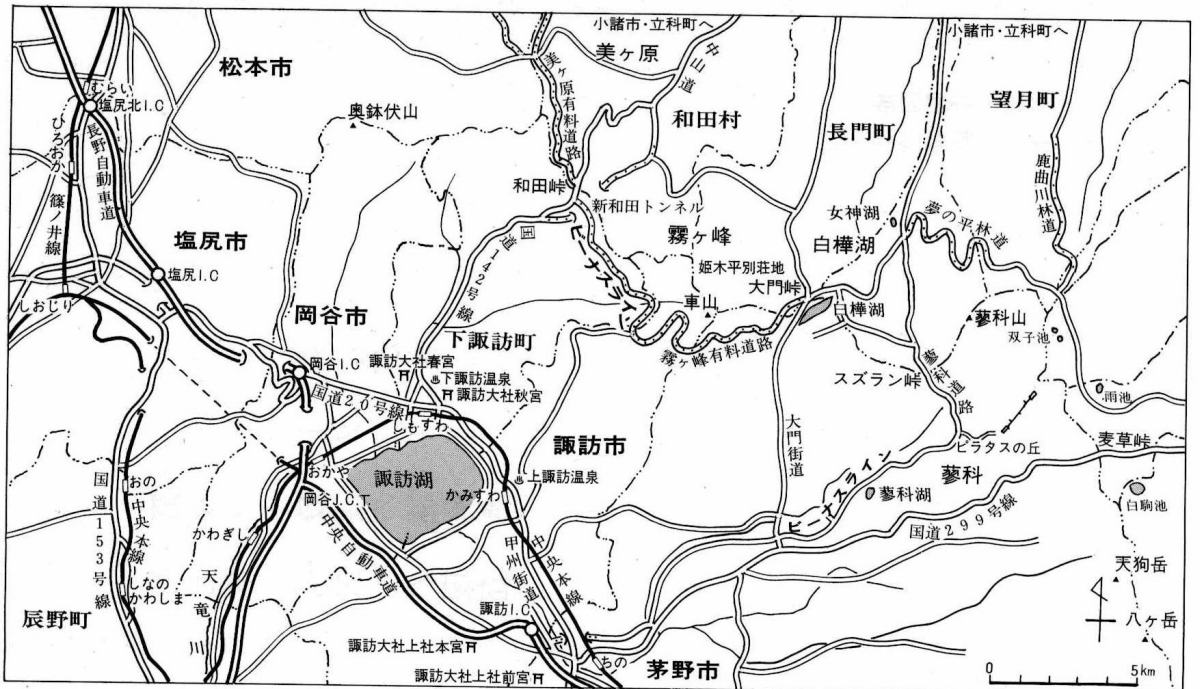
此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ビーナス殺人ライン・目次

プロローグ　9
第一章　女神湖　15
第二章　静湖荘の殺人　42
第三章　白樺湖の捜索　73
第四章　女神湖の殺人　106
第五章　湖岸通りの容疑者　139
第六章　風の証人　171

第七章　過去への捜査　200
第八章　最後の謎解き　227
エピローグ　257
あとがき　260

本文挿画・鈴木英人
地図製作・ポラーノ


松本市
塩尻市
岡谷市
諏訪市
茅野市
辰野町
長門町
望月町
和田村
下諏訪町
小諸市・立科町へ
美ヶ原
中山道
美ヶ原有料道路
奥鉢伏山
和田峠
新和田トンネル
霧ヶ峰
姫木平別荘地
大門峠
車山
女神湖
白樺湖
夢の平林道
鹿曲川林道
蓼科山
双子池
雨池
スズラン峠
蓼科道路
ビラタスの丘
麦草峠
蓼科
蓼科湖
白駒池
天狗岳
八ヶ岳
ビーナスライン
霧ヶ峰有料道路
大門街道
国道299号線
国道20号線
諏訪湖
諏訪大社春宮
下諏訪温泉
諏訪大社秋宮
上諏訪温泉
諏訪大社上社本宮
諏訪大社上社前宮
諏訪I.C
岡谷I.C
岡谷I.C.T
塩尻I.C
塩尻北I.C
しおじり
むらい
ひろおか
篠ノ井線
長野自動車道
中央自動車道
甲州街道
中央本線
中央本線
国道153号線
おの
しなの
かわしま
かわぎし
天竜川
しもすわ
おかや
かみすわ
ちの
0
5km

プロローグ

『僕は今生きている。生きているって、なんて素晴らしいんだろう。』

その手帳の一ページには、そんな言葉が書き殴られていた。薄汚れて皺になった紙に、そのときの彼の感動を物語るような乱暴な字体で書かれている。

ひとりの少女が、たった三十字のその文章を食い入るように読んでいた。つぶらな鳶色の瞳が文字をおって何度も上下に動く。

彼女はオートバイにもたれていた。肩から袖にかけて白いラインの入った、赤のライダー・ジャケットを着ていて、両手で包むようにして手帳を持っている。

一台のトラックが、轟音をあげて彼女の前を走り出し、長い髪を巻き上げた。

ここは名神高速、養老サーヴィス・エリア。広い駐車場と休憩施設のあるここは、長距離トラックのドライヴァーや旅行客の利用者が多い。彼女のすぐ近くにもバイクでツーリングしているらしき一団が屯していた。見たところ男ばかりのグループで、七台ものカラフルなバイクが並んでいる。彼らは先程から赤いGSX－Rの少女が気になってしょうがないのだ。声をかけたくてうずうずしているのが、態度に表われていた。

そのうちひとりの青年が、仲間の期待を集めつつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

彼女に近づいた。
「こんにちは」
ビクッとして少女は顔を上げた。その瞳の大きさに、男は戸惑ったようにぎこちなく喋った。
「君、ひとり？」
まずい質問だった。さっと警戒心のバリアが、彼女のまわりに張り巡らされたようだった。
「あ、僕ら、東京の大学の学生なんだ。バイク好きの仲間でツーリングに来てんの。怪しい者じゃないのよ」
青年は相手の警戒心をとこうと、つとめて人当たりのいい調子でいった。
少女がちらと見ると、屯していたライダーたちが愛想のいい笑いを浮かべる。軽く手を上げて挨拶する者もいる。
バイク仲間と分かって、彼女はやや気を緩めたようだった。わずかに頬をほころばせる。
「君、どこから来たの？」
「松江……」
彼女は小さな声でいった。トーンの高い可愛い声だった。
「松江って、鳥取の？」
「島根です」
「あ、そうだったっけ。へえ、そんなに遠くから来たの。ひとりで？」
「はい……」
「どこまで行くの？」
「諏訪、です」
彼女は少し歯切れがよくなってきた。
「諏訪って長野県だよ。すごいんだね。ひとりでそんなに遠くまでツーリングなんて」
男は彼女が打ち解けてきてくれたので、調子が出てきたようだった。
「そういえば、諏訪っていうと、蓼科とかビーナスラインが近いんだよね。そこまで行くんなら、ビーナスラインを走ってきたらいいよ。あそこはすごくきれいだから。白樺湖もあるし」
「はい。ビーナスラインは走らなきゃいけないんで

す」
「走らなきゃ……？」男は彼女のいい方に違和感を覚えたようだったが、一瞬のことだった。「失礼だけど、君、高校生？」
「いえ、いちおう大学です」
「どこの大学なの？」
「米子の鳥取大学です」
「一年生、かな？」
「はい」
「GSX―R、これ、Ⅲ型だよね。僕もGSX―Rのシリーズの中じゃ、このヨシムラ・カラーのⅢ型が一番すきなんだよね」
「ツーリングだと、ポジションが辛いです。すぐに腕が痛くなってきて、シートが薄いから、お尻も痛くなっちゃうし」
　彼女はちょっと小憎らしくて、思いどおりにならない恋人のことを話すようにいった。
「うん、分かる分かる。僕もね、今はBROSに乗ってるんだけど、前はね、CBR400Rだったの。だから、その苦労、分かるなあ。やっぱ、ツーリングだとポジションが重要だもんね」
「そうだよね、お尻が痛いのは辛いよね」
　今まで近くで話を聞いていた男たちが、急に話に割り込んできた。どうみても三十幾つにしかみえないような、髭面の男が彼女の前に顔を突き出す。
「俺のエリミネーターはいいっすよ。なんたって、シートが厚いし、ライ・ポジも抜群に楽だから。どうすか、ちょっと俺の後ろにタンデムしてみたら」
「高速道路では、タンデムできないよ、門田さん」
「いや、こいつならやりかねん」
　と、別の仲間がまぜっ返す。
　笑いが起こり、女の子も楽しげに男たちに囲まれた。しばらく、彼らはおもしろおかしいバイク談義に花を咲かせた。
「でも、女の子ひとりでビーナスラインを走りに行くなんて勇ましいよね」
「ええ、あの……」
　なにかいおうとして、彼女は口をつぐんだ。

「どうかした？」
「いえ、なんでも……。ここからだと、諏訪までどのくらいかかりますか」
「距離は、ざっと二百五、六十ってとこだな。三時間ぐらいかね」
門田と呼ばれた髭面男がいった。
「え、まだ、三時間もかかりますか」
彼女は驚いたようにいった。
「今、三時ちょうどだから、到着は六時頃かな」
「あの、ごめんなさい。あたし、急ぎますから」
彼女はそういって、赤いヘルメットを手に取った。突然、なにかを思い出したみたいな急ぎ方だった。ヘルメットをかぶると、ひらりとマシンに跨がる。
男たちは止める言葉も出てこなかった。もどかしげに、喉に声をつかえさせているうちに彼女はエンジンをかけ、「それじゃ」といってバイクを走り出させる。
ああ、と残念そうな声が上がった。集合マフラーからの快音を彼らに浴びせて、GSX－Rは広い駐車場を走り去っていく。
あっという間に美少女は、彼らを置き去りにしてサーヴィス・エリアを出て行ってしまった。彼らはその後ろ姿を、もの惜しげな感じで見送っていた。
「あ～あ、いっちゃった」
残念そうな声が上がる。
「門田が悪い、門田が」
「そうだ、門田さんの人相が悪いから逃げたんじゃないか」
「なにいってやがる。そういうお前さんたちのマスクはどうなんだよ。五十歩百歩じゃないか」
「いや、なんといっても八幡のナンパの仕方が悪い」
ひとりが鋭く指摘した。
「悪うございましたね。そいじゃ、みなさんが今度やってみてくださいよ」
最初に声をかけた青年が、ちょっとひねた口調で応える。長身で、しかも細い目の優しげな顔立ちをしていて、このメンバーの中では一番、女の子受け

が良さそうだ。
「なに揉めてるの？」
ふたりの女性が休憩所の建物から出てきた。ひとりはロングヘアで、ブルーのジャケットを着ている。もうひとりは丸顔でピンクのジャケットだ。対照的な二人で、ブルーが成熟した女性の雰囲気をもっているのに対し、ピンクはどことなく幼さの残る無邪気さを顔立ちに感じさせた。
「なにかあったの？」
ブルーのジャケットの女性がいった。
「いや、ちょっとね……」
男たちは苦笑を浮かべて顔を見合わせた。すでにメンバーの中に美女を抱えているにもかかわらず、ほかの女の子に声を掛けた後ろめたさみたいなものが笑いに表われている。
「どうせ、また可愛い娘に住所でも聞いてたんでしょ」
ブルーの方が、ずばり核心をつくようなことをいった。
「いや、さすが高城さん、みごとに見透かされてしまいましたねえ」
門田が冗談めかしていった。
「おい、これ、先程の彼女のじゃないか？」
突然、ひとりが腰を屈めて、足元に落ちていた一冊の手帳を拾いあげた。それを八幡が手に取ってみる。
「そうだよ。これ、彼女が熱心に見てたやつだ」
「届けてやるか!?」
拾った男が、素晴らしい思いつきであるかのようにいった。
「なにいってんだよ。彼女は長野へ行くんだぞ。中央自動車道だ。俺たちはこれから静岡、伊豆とまわって帰るってのに、方向が違うだろ」
「でも、すぐに追いかけりゃ、間に合うよ」
「そりゃ、そうだな。ここから小牧のジャンクションまでに追いつけばいいんだから。女の子だから、そんなに飛ばさないだろうし」
「あとで、郵便かなにかで届けてあげてもいいじゃ

ない。住所くらい書いてあるんでしょう?」
高城と呼ばれたブルーのジャケットの女性が、馬鹿ばかしそうにいった。男たちがちょっと話しただけの女の子のために盛り上がっているのが、理解できないといった様子だ。
「川村裕明……男の名前が書いてある」
八幡が、手帳の最後のページを開いていった。パラパラと何枚か捲って見てみる。ふと手を止め、彼女が見入っていた文章を見つける。
「『僕は今生きている。生きているって、なんて素晴らしいんだろう。』……」
ぷっと、誰かが吹き出した。
「なんだよ、それ。くっせえ」
八幡も自分で読んでしまってからそう思ったのか、苦笑を浮かべた。

少女はサーヴィス・エリアを出ると、スロットルを軽やかに開けた。キュイーンとエンジンが唸りを上げ、赤いGSX−Rはみるみるスピードを上げる。景色が熱に溶け出すバターのように、彼女の視野に流れた。
彼女はスクリーンのなかに身を伏せ、じっと前方だけを見詰めた。硬いアスファルトが広い平野を名古屋に向かって、一直線に伸びている。
彼女は、さらにスピードを上げ、その長い長いストレート・コースをみるみる消化していった。
そして、小牧のジャンクションに到達すると、彼女は緩やかな分かれ道を、中央高速のほうへ流れ込んでいった。

第一章　女神湖

1

ちっぽけな湖が、ぼくの目の前にポツンと横たわっていた。まるで、天に住む大男が地上に落とした涙が水たまりになったような、そんな湖だ。もっとも、『ジャックと豆の木』ではあるまいし、大男というのは、あまりロマンティックでないかもしれない。ここは蓼科、女神湖である。

名前の由来など知らないが、蓼科山が女神の山と呼ばれているらしいから、そのへんがこの湖の名付けのもとになっているのだろう。

ぼくは岸辺に立って、静かな緑の林に囲まれた湖を眺めていた。水面には、向こう岸の風景が映っていて、美しい。

ほっと溜息をつく。やはり、ここへ来てしまった。

とりあえず、バイクのリア・シートにくくりつけてきた花束を、岸辺にそっと供える。要するに、ぼくはこれがやりたくて旅に出たらしい。バイクで旅などというと、結構、かっこいいのだが、実はそんなものではなかったようだ。

出発からして、そうだった。その日、最後のバイトから帰ってくるや、猛烈な衝動が湧いてきて、自分を抑えられなくなった。これで先立つものさえ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton